フィロソフィーを社会実装し、よりよい世界を次の世代へ繋ぐ

企業リポート

松　倉　大　士*

We create your philosophical lifestyle

Key Words：Philosophy, Well-being, Travel, Mentoring, Education, Technology

はじめの問い

私は10歳の頃、満天の星空の、そのあまりの圧倒的なスケールに、自我を失うほどの衝撃を受けた。それは自分の存在の小ささをつきつけられる経験だった。

森羅万象に対する驚きと敬意、そして森羅万象を理解しようとする「我々」の存在そのものについての疑問は、「Q. 我々はどこから来たのか？我々は何者か？我々はどこへ行くのか？」という問いとして、私の中で深く根付いている。

私はこれまで、世界最先端・最高峰のサイエンスやテクノロジー、ビジネスやファイナンスのプロジェクトに触れてきたが、この問いは人生のどの場面でも出現してくる本質的な問いになっている。

- 宇宙における生命や惑星の起源探査において研究者達に問われる、「Q. 我々はどこから来たのか？」
- Deal Value $10+Bn をゆうにおける Corporate Transaction の交渉の場において企業の CxO に問われる、「Q. 我々は何者か？」
- 多くの人が認知もしていなかったビジョンやサービス・プロダクトを目の前にした投資検討の場において投資家陣に問われる、「Q. 我々はどこへ行くのか？」

* Daishi Matsukura

アントレプレナー｜フィロソフィーや問いのエキスパート｜シリコンバレー在住

東京工業大学大学院 地球惑星科学専攻修了。米Morgan Stanley（投資銀行部門）、宇宙スタートアップispaceのChief Mission Officerを経て、現在wov, inc.のFounder&Co-CEO、Philosophy Technologies, Inc.（シリコンバレー）のCo-Founder&Co-CEO。その他、投資ファンド（ニューヨーク）のパートナー、複数社の社外取締役、Plug and PlayやJETROのプログラムのメンター。Forbes 30 Under 30 Japan/Asiaを輩出。
E-mail：daishi.matsukura@wov.academy
daishi@philosophy.tech

問い→フィロソフィー

このような本質的な問いに対して、人類の歴史を通して、正面から向き合い続けているアプローチがある。それはフィロソフィー（日本語訳で哲学）だ。問いに対するフィロソフィーのアプローチを一言でまとめると、そもそもなにが問われているのかを明らかにし、答えが一意に定まらない問いに対して挑む活動だ。

智を愛する、が語源とされるフィロソフィーは、世界の成り立ちからひとの日々の苦悩に至るまで、あらゆるものを智の対象とする。そして、「Q. I wonder ... ?」で始まる問いを通して、人類の叡智を築いてきた。例えば、あらゆるひとに問うことで、生涯を通して問う活動を自身で体現したソクラテス。森羅万象へ問う行動そのものを、学問という体系に乗せたアリストテレス。自然現象に対して問うことで、自然哲学から自然科学への契機を産み出したデカルト。精神に対して問うことで、精神解析を築いたフロイト。フィロソフィーのアプローチで問われてきたことは、時を経て私たちの社会の基礎となっている。

本稿では、問い＝理想や予測に対して目の前に起きている現実との間に認知した差異（Δ）そのものと定義する。問い＝差異（Δ）という前提に立って、我々が日々触れることが多い問いを具体的に挙げてみよう。例えば、世界で起きている戦争や公衆衛生の「問題」も、理想と現実の差異（Δ）という問いの1つ。テストや試験に出てくる「設問」も、既知と未知の差異（Δ）という問いの1つ。ひとや組織が抱える「課題」も、在りたい姿と現在の姿の差異（Δ）という問いの1つ。それだけでなく、日々の生活で湧いてくる素朴な疑問、不思議だなと感じる感情、なにかがおかしいと思う違和感のような、言語化できないような何かしらの差異（Δ）も問いである。

Fig. 1　人類はどのように問いを活用してきたか（wov 編集） [1]

このように問いとは私たちにとって非常に身近な存在であり、その問いをどう立てるか、そしてどう解くか挑み続けていると、やがて理想や未来の実現に繋がり、人類の叡智を築き、私たちの社会の基礎となる。問いの効能に注目し、問いを活用してきたのは、アカデミアの研究者だけと思われがちだが、決してそうではない。ビジネスの最先端を切り拓く経営者や投資家、インタビュアー、コーチに至るまで、問いを日々活用している（Fig.1）。

社会の問題は複雑化・多様化し、過去シンプルな問題を解決してきたツールだけでは太刀打ちできなくなっている。また昨今、問いに対するフィロソフィーの有用性が様々なメディアで紹介され、問いに対する重要性が各領域のパイオニアと呼ばれる層に浸透しつつある。しかし、フィロソフィーは社会全体に十分浸透していない。

浸透していない理由として、自分の問いを考える習慣がないことが挙げられる。背景には、誰かの問いにすぐに答え始める（問題解決にすぐに移る）ことが習慣化しているためと考えられる。

このような傾向を産む理由の１つとして、幼少期における学校教育の手法が挙げられる。「他人から与えられた問い」かつ「答えが一つに定まることが予め分かっている問い」を、「みなで一斉に問いを解き」、「誰がどれだけ早く時間内に問いの答えにたどり着けたか」を、「評価する」という手法である。この手法が善い悪いということではなく、誰かの問いを解くことに慣れすぎてしまい、自ら問いを考える習慣、そして日々解くことに忙殺されそのような時間さえ確保するのが難しいのが原因と考えられる。次節以降は、i) どのようにフィロソフィーを社会全体に実装し、認知・浸透を広げていくか、ii) 社会実装を通じて、どのようなよりよい世界を次の世代へ繋いでいくかについて、私の活動を中心にご紹介する。

フィロソフィー x 旅

本稿では、社会実装例の１つとして、フィロソフィー x 旅を挙げる。日常の場所から離れ、かつ時間的な余裕がある旅は、フィロソフィーと相性がよい。また、新たな土地で普段とは異なる言語やその土地の匂いに触れるだけでも、人の脳のシナプス構造を変化させ、よりクリエイティブになる研究結果 [2] や、旅は健康やウェルネスにポジティブな効果がある調査結果 [3] も得られている。

そこで私たち wov（ウァーヴ、日本）は、探求心をかき立てる新たな旅の形として Philosophy Quest を世界中で提供している（Fig.2, 3）。Philosophy Quest の対象は、親子やパートナー、大事な友人と一緒に旅をしている人たちである。参加者の旅先で、弊社提携の現地大学の哲学者とセッションを行い、人生で大事な問いを哲学者と一緒に考えることで、普段の旅をより大事な旅へと昇華させていくサービスである。

Fig. 2　Philosophy Quest ハワイ

Fig. 3　Philosophy Quest 鎌倉

哲学者が行うセッションは、フィロソフィーで培われてきたメソッドに基づき、弊社で検証された独自のコンテンツで構成されている。例えば下記のようなアクティビティが含まれている。

- 哲学ウォーク[*4]: 哲学者の名言を心に留めながら、自然の中を散策する哲学のフィールドワーク。木々の香り、土の感触、鳥の声、空の色などに触れ、五感を最大限活用し、じっくりと考えを深めることができる
- 五感による自己探求：自分の五感を使って行う自分自身の探求。見たり、聞いたり、触ったり、匂いを嗅いだり、味わったりすることで、自分の感覚を活性化させ、自己理解を深めることが目的。具体的には、日常の中で見慣れた風景や身近な食べ物、飲み物などに全身の注意を向けて、その感触や香り、味などをじっくりと味わう。身体的な感覚を自分の感情や思考と関連付けて言語化することで、より深い自己探求や人生の豊かさについて考えることができる
- 問いの探検：問いを体系的に学び、自分自身の問いを探求するプロセス。参加者同士で問いを意識したコミュニケーションを行うことで、自分自身の問いの特徴やバイアスに気づいたり、他者への問いかけや問いに対するフィードバックを通して、問いをブラッシュアップすることができる
- 哲学対話：哲学的な問題やテーマで参加者が自由に意見を交換するプロセス。哲学対話を通じて深い理解や新しい視点を得ること、自己の考えや信念を探求すること、そして他者との共感や理解を深めることができる

また、Philosophy Quest は、下記のような外部機関との提携をスタートしており、各機関との提携拡大を求めている。

- 各国各地域の観光局や自治体（観光コンテンツおよび観光誘致コンテンツとして）
- 小中高の教育機関やインターナショナルスクール（親子向けの探求の場として）
- 美術館（アート鑑賞を深めるコンテンツとして）
- 大学や大学院（研究者の卵である大学生や大学院生の探求活動として）
- 企業の取締役・CxO チーム（意思決定、探索、チームビルディングとして）

フィロソフィー x テクノロジー

本稿では、社会実装例のもう1つの例として、フィロソフィー x テクノロジーを挙げる。フィロソフィー x 旅は非日常での社会実装であるが、私たち Philosophy Technologies（フィロソフィー・テ

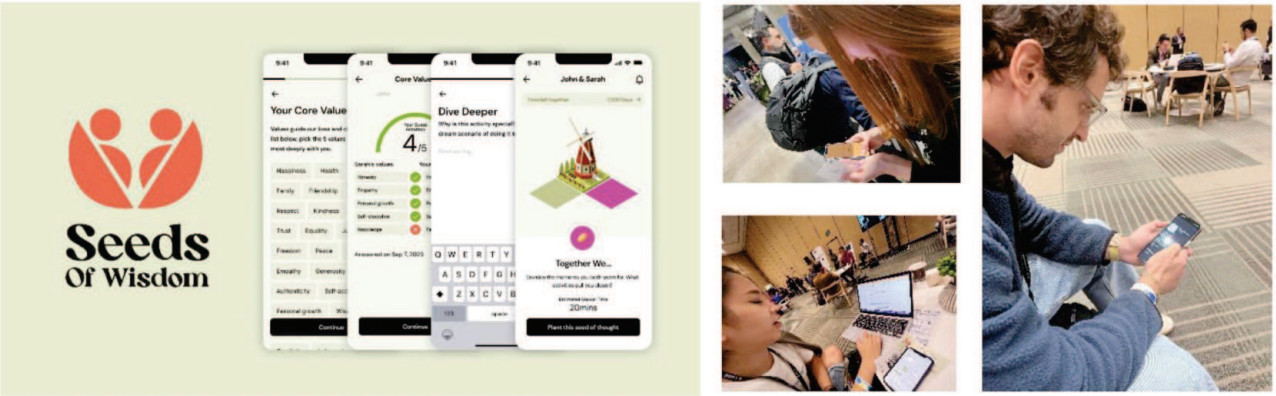

Fig. 4　フィロソフィー x テクノロジーの例 − Seeds Of Wisdom（SOW）※現在は招待制

クノロジーズ、米国）が開発する Seeds Of Wisdom（以下、SOW）は、日常の大事なひととの対話を深い対話へ変える、Well-being 領域の新しい対話アプリケーションである（Fig. 4）。SOW の対象は、親子やパートナー、大事な友人である。アプリケーションは、1対1のクローズドな対話に特化し、哲学者監修の問いを通して、手紙のようなスローかつ心に刻まれるコミュニケーションをマップで可視化しながら実現する。

情報通信技術の発達で、ひととひとはインスタントにメッセージを送り合えるようになった。既存のチャットツールは、通信手段としてのひととひとの繋がりを近づけた一方、コミュニケーションの質としての繋がりが薄れていく問題が生じている。

例えば、SNS 上の友人数が 1,000 人存在したとして、いますぐ電話相談できる相手は何人いるだろうか？最近、大切なひとと、業務連絡ではない大切な話をしたのはいつだろうか？そもそも、相手だけでなく自分ともちゃんと対話できているだろうか？

SOW は、テクノロジーを活用し、ひととひとの繋がりをよりよくすることをきっかけに、フィロソフィーを日常でも味わえるライフスタイルを社会実装している。

フィロソフィー x ●●

これまで、問い→フィロソフィー→社会実装の具体例としてフィロソフィー x 旅、フィロソフィー x テクノロジーを紹介した。その他、wov ではフィロソフィー x 経営メンタリングを行い、経営者が意思決定する際に考えるべき問いを一緒に立てるなど、独自のメソッドで経営者の意思決定の質とスピードを上げるサービスも行っている。また、Podcast を配信し、会社では教えてくれないビジネス・フィロソフィー（入門編）、などビジネスパーソン向けのフィロソフィー啓蒙活動も行っている。

よりよい世界を次の世代に繋いでいくことは、私のモチベーションの源泉である。そして、フィロソフィーは、アカデミアに留まらず社会全体にいま必要とされるアプローチである。先人が問いながら築いてきた社会の基礎を後人へ引き継ぐ。過去答えがわかったと思い込んでいたつもりの問いを問い直し、全く別次元の答えを発掘する。そして、これまで問われなかった新たな問いを発見し、新たな叡智を築き、次世代に問うてもらう連鎖となると考えている。

フィロソフィーは、世代を超えて生き続ける。

参考文献

1) Hal Gregersen『Questions Are the Answer』(2018)
2) Maddux, W. W., & Galinsky, A. D. (2009). Cultural borders and mental barriers: The relationship between living abroad and creativity. Journal of Personality and Social Psychology
3) Chun-Chu, C., & Petrick, J. (2013). Health and Wellness Benefits of Travel Experiences A Literature Review
4) Peter Harteloh (2014). The Nine Steps of a Philosophical Walk